

所長の新任あいさつ



これからの 時代における工業技術センターの役割

鹿児島県工業技術センター
所長 廣末英晴

明けましておめでとうございます。本年も皆様にとりましてよい年でありますようお願いしております。

さて、平成8年12月1日付けで、当工業技術センターの所長を拝命し早くも一月が過ぎようとしています。慌ただしく時間のみが過ぎてゆき、まだ各研究部でどのような研究を行っているのか詳細には把握できていない状況ですが、これまでの私と工業技術センターとの関わり、現在及びこれからの時代における工業技術センターの役割について述べてみたいと思います。

約30年前、現在の九州工業技術研究所の前身、九州工業技術試験所へ就職して初めて命じられた仕事がシラスの有効利用で、そのシラスの調査及び採取のために当時の鹿児島県工業試験場にお世話になったのが私と当工業技術センターとのお付き合いの始まりでした。それから約15年前に低品位窯業原料の高度利用のテーマで共同研究をしました。

また、最近ではバイオマスの有効利用のテーマで共同研究をし、調査あるいは研究の打ち合わせのために新しくなった当工業技術センターに数回お邪魔しました。このように古くは試験場時代から、最近では工業技術センターに変わってからも共同研究等を通じて数回当地を訪れた関係で何人かの知り合いをつくることが出来ました。従って今回の異動命令を受けたときも特別深く考えることなく、むしろ新しい人との出会い、そこでの緊張感、さらには研究者の育成などへの大きな期待を持って着任しました。

次に現在及びこれからの時代における工業技術センターの役割について述べてみたいと思います。皆様も御存じの通り企業の海外進出は急で、最近

では研究所も海外に多数設置されていると聞いています。まさに、産業の空洞化のみならず頭脳の空洞化も進行しつつあると言わなければなりません。我々の身の回りの品物を見わたしましても海外で生産されたいろいろな物が日本に逆輸入されてきていることをお気付きのことと思います。

このような時代に工業技術センターはどのようなべきでしょうか？ 工業技術センターが現在の準人の地に設立され、今年の12月1日で10年になります。設立以来、従来から行ってきました地域への技術支援（技術指導・相談、試験分析など）に加えて、研究開発、情報発信機能の強化に取り組んできました。研究開発機能も各企業へのニーズ対応型研究から将来を見据えたシーズ開発型研究へも取り組みが広がってきています。特に後者のシーズ開発型研究を行う場合は、日本国内はもとより世界の研究機関との競争になります。研究と言うからには、世界で誰も見いだしていない現象の発見、新しいプロセスあるいは材料の開発、そのメカニズムの解明が図られるべきであると思います。そして、新事実に基づいて特許をとり、レベルの高い学術雑誌に成果を公表し、更に地元の企業と一緒に新産業を創出することが一つの理想型であります。

幸いにして、当工業技術センターには有能な研究者が揃っています。これらの研究者と共に高いレベルでの研究開発、情報発信を目指し、激動の時代に生きる県内中小企業の方々の”技術的抛りどころ”になれるよう精一杯頑張っゆきたいと思っています。どうぞこれからも原前所長のとくと同様に工業技術センターへの御支援とごべんたつをお願いしまして私の着任のあいさつと致します。